

令和元年度・令和2年度 新潟県・新潟市小学校教育研究会 指定研究事業（最終年次）

研究主題

自ら学びを舵取りするとともに
多様な他者と共に助け合いながら
明るい未来を切り拓く子どもの育成
～新しい生活様式を取り入れた特別活動の実現を目指して～

令和2年11月27日

新潟県・新潟市小学校教育研究会

新潟市立小須戸小学校

令和2年度 小須戸小学校 研究全体計画

新潟市立小須戸小学校 研究推進委員会

I. 研究主題

**自らの学びを舵取りするとともに
多様な他者と助け合いながら 明るい未来を切り拓く子どもの育成**

II. 研究主題設定の理由

1. はじめに

現在、新型コロナウイルスの感染拡大により、学習指導要領解説の総説に示されている「予測が困難な時代」の渦中にある。状況が日々刻々と変化し、先行きが不透明な中で学校生活は、教職員はもとより、子どもたちに様々な不安や心理的な負担感等の影響を与え続けている。

しかし、当たり前前の日常が奪われた時だからこそ、目指す子どもの姿を改めて見直す好機として捉え直すことができた。当校では、目指す子どもの姿を「自らの学びを舵取りするとともに 多様な他者と助け合いながら 明るい未来を切り拓く子ども」と再設定した。また、このような子どもに求められる資質・能力を、伝える力、認める力、律する力とし、以下のように定義した。

伝える力	仲間と共に学び合う中で、相手や場面などに応じて自分の考えや思いを発信する力
認める力	多様な他者とかがわり合う中で、考え方・思いを理解したり、共感したりする力
律する力	自分自身と向き合いながら、自らよりよい方法を選択する力

これらの資質・能力は、当校の教育ビジョンに掲げている「学び合い」「かがわり合い」「自分と向き合い」という学習過程を大切にしながら育成する。また、これらの資質・能力を育成するための3つの柱として、特別活動、学びのユニバーサルデザイン、ICT活用推進を設定し、研究を推進する。

2. 特別活動の視点から

特別活動は、コロナ禍において非常に厳しい状況にある。世間では、学習の進度に注目が集まっている一方で、次々と子どもたちが楽しみにしている行事や活動は削減されている。そんな今だからこそ、学校には、大きく発想を転換し、新しい特別活動を創り出すことが求められている。

しかし、それは教師だけの役目ではない。誰もが直面したことのない国難とも言える状況だからこそ、子どもたちと教師が一緒になってお互いの考えを伝え合い、試行錯誤しながらよりよいものを創り上げようと目の前の課題を解決したり、創意工夫を生かして、今までとは違う新たな活動を生み出したりすることが求められる。とりわけ、「なすことによって学ぶ」ことを方法原理とする特別活動では、困難から逃げ出したり諦めたりするのではなく、知恵を出し合い、仲間と力を合わせ、自分たちの力で明るい未来を切り拓くことができることを、子どもたち自身が実際の体験を通して学ぶことが非常に重要である。

当たり前だったことが失われた今だからこそ、子どもたちはこれまで以上に、仲間と共に「困難を乗り越える体験」「新しいものを創り出す体験」をすることができる。特別活動の可能性を最大限に生かして、これからの時代に求められる資質・能力の育成を目指す。

3. 学びのユニバーサルデザインの視点から

学びのユニバーサルデザイン（以下 UDL）は、当校が最も大切にしている授業デザインの概念的なフレームワークである。UDLは、脳科学、学習科学、発達心理学、神経心理学等の科学的なエビデンスに基づいて開発されている。今後、教師が「どう教えるか」から、学習者が「どのように学ぶか」へのマインドセットの転換が必要になる。つまり、教師は知識を授けることから、学習者を傍らから支援することへの変化が強く求められるということである。

子どもたちが自分で自分に合った学び方を選び、主体的に学ぶために、私たちはUDLの3原則（「取り込み」「提示・理解」「行動と表出」）に基づいて柔軟に授業や教育課程をデザインすることが求められる。さらにUDLへの理解を深め、実践を重ねることで授業改革を進める。また、従来型の「授業研究・協議会」のセットの研修ではなく、オンライン上で日常的に授業実践を交流し合う研修スタイルを取り入れながら、私たち自身も子どもたちと同様に、主体的に学ぶ教師集団を目指す。

4. ICT 活用の視点から

ICTの活用は、文部科学省が打ち出したGIGAスクール構想によって、今まで以上に強く求められるようになり、全国の自治体が大きく動き始めた。今後は子どもたちの学び方も劇的に変化する。

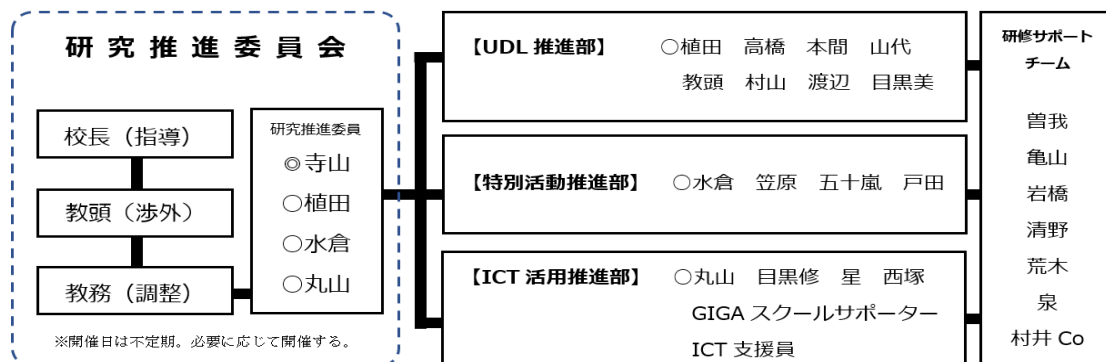
当校は授業改革パイロット事業推進校として、iPadの整備・運用の過程で直面する課題に1つずつ向き合い、確実に歩みを進めている最中である。引き続き、試行錯誤しながら課題を解決していくとともに、子どもたちが新たな学び方を身に付けていくために、私たちのICT活用能力を高めていく必要がある。

今後、教師に求められるのは、iPadを上手に使いこなす力だけではない。確実に子どもたちの資質・能力を育成することができるよう、今までの学習指導とICTとの最適な組み合わせを模索したり、先行実践などを手掛かりに、効果的な活用方法を研究したりすることが求められる。今まで諦めていたことや不可能だと思っていたことの実現可能性が飛躍的に向上する。例えば、地球の裏側に住んでいる友達とオンライン上で学び合うこともできる。VR（仮想現実）を活用することにより、より実体験に近い体験的な学習が実現される可能性もある。コロナ禍で懸念されている「3密」を解消して学び合うこともできる。今後の教育の可能性は格段に広がる。

子どもたちの方が大人より遥かに柔軟な発想でiPadを使いこなしていくはずである。授業の中で劇的に変化していく子どもたちの成長を楽しみながら、研究を進めていく。

Ⅲ. 研究体制

特別活動、UDL、ICT活用推進の3つの取組を確実に推進するために、3つの推進部とサポートチームを組織した。さらに、各推進部の方向性を協議・確認したり、研究全体の方向性を協議したりする組織として研究推進委員会を立ち上げた。



IV. 校内研究のグランドデザイン

教育目標 よく考え 助け合う 子ども

3つの資質・能力

伝える力

認める力

律する力

UDL × 特別活動

学びのユニバーサルデザインを取り入れた授業では、子どもは主体的に様々な課題に取り組み、自分に合った方法で課題解決していく。

特別活動では、集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせながら、多様な他者の考えを理解し、合意形成を図り、主体的に課題解決をしていく。

話し合いでの発言に限定せず、子どもが自分に合った考えの伝え方を選択することで、より多くの子どもが話し合いに参画できる。

特別活動推進

- ・認め合い、思いやる心を育てる特別活動の推進
- ・かかわり合いを広げ、深めるあいさつの励行
- ・新しい特別活動の発案・計画・実践
- ・自己調整を目指す元気アップ週間等の取り組み

特別活動 × ICT

特別活動には、「子どもたちが様々な集団活動に自主的・実践的に取り組む」という特性がある。しかし、集団活動は制限されている。

そこで、ICTの可能性を最大限活用し、新しい生活様式を取り入れた特別活動について研究する。

既存の活動、例年通りの行事が実施できない今だからこそ、子どもたちが創意工夫を最大限発揮して、ゼロベースから新しい特別活動を創り出すチャンスである。

【研究主題】

自らの学びを舵取りするとともに
多様な他者と助け合いながら
明るい未来を切り拓く子どもの育成

UDL 推進

- ・学びのユニバーサルデザインに基づいた授業改革
- ・対話的な学びを活性化する手立ての工夫
- ・Google classroom を活用した新しい授業研究
- ・多様な学びを認め合い高め合う学級風土の醸成

ICT活用推進

- ・ロイロノートを活用した授業づくりの推進
- ・GIGA スクール構想に関連した各種対応・環境整備
- ・オンライン授業を見据えた「新しい学び方」の模索
- ・メンター制を活用した日常的・継続的な研修の実施

UDL × ICT

学びのユニバーサルデザインを実現するためには、多様なオプションの提供が必要になる。その際に有効活用できるのがICTの力である。1人1台端末を活用した授業改革パイロット事業推進校としてロイロノートを活用し、UDLを実現した授業の研究を推進していく。

V. 特別活動研究の概要

研究主題

自らの学びを舵取りするとともに
多様な他者と助け合いながら 明るい未来を切り拓く子どもの育成
～新しい生活様式を取り入れた特別活動の実現を目指して～

1. はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大により、世間では非常に多くのものが失われた。学校教育もその例外ではない。小中高校などでの全国一斉休校等により、オンライン授業や動画配信サービスを活用した学びなど、「学校に登校しない学び方」にも注目が集まっており、学校そのものの存在意義が問われている。

学校は、子どもたちにとって一番身近な社会である。集団活動を中核とし、学校生活そのものを対象にしている特別活動での学びは、「学校でしか学べないこと」の1つである。特別活動で育成する資質・能力は、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」という3つの視点で整理されており、これらは多様な考え方もった人が集まる学校だからこそ育むことができる。

学校は、多様な考え方もった人と人との関わり合う場であり、「社会の縮図」と言える。時には意見の相違により友達と対立することもある。自分の思い通りにならないこともある。実現が極めて難しいこともある。それらを仲間と力を合わせて乗り越えたり、試行錯誤しながら新たなものを創り出したりする特別活動の「なすことによって学ぶ」ことで得た経験は、将来忘れられない思い出につながり、必ず実生活・実社会での生きた学びになる。

これからの時代を見据え、今だからこそ、研究主題「自らの学びを舵取りするとともに 多様な他者と助け合いながら 明るい未来を切り拓く子どもの育成」を目指した特別活動の研究推進を行う必要がある。

2. 研究主題と特別活動との関連

自らの学びを舵取りするとは、学校生活や多様な集団の中で、自分で自分に合った学び方を選んだり考えたりしながら、自ら進んで学び続けることである。自分に合った学び方を実現するためには、子ども自身が自分にどのような学び方が適しているのか自覚することが必要になる。多様な他者と助け合いながら明るい未来を切り拓くとは、学校生活や多様な集団の中で、集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせながら、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や生活上の課題を解決し、よりよい集団や学校生活を創り出すことである。

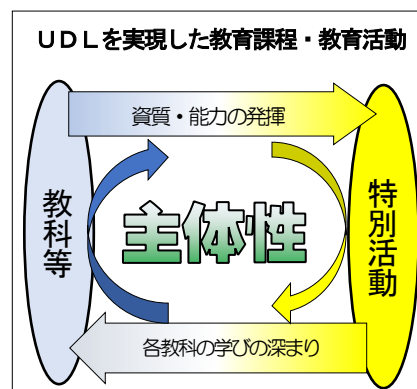
当校が目指す子どもの姿は、特別活動の目標・内容と重なる部分が多い。学級活動（1）学級や学校における生活づくりへの参画は、よりよい合意形成を目指す一連の学習過程を大切にしている。（2）日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全は、資料を手掛かりに日々の生活を振り返り、自分自身で個人目標を意思決定する学習過程である。（3）一人一人のキャリア形成と自己実現 においても、これまでの活動を振り返るとともに、これからの学びや生き方を見通し、自分自身で個人目標について意思決定する。

新型コロナウイルスの影響により、当たり前前の日常が奪われた。学校も、当たり前だった行事や活動ができなくなった。しかし、大きく発想を転換し、この困難を、子どもたちが仲間と共に「困難を乗り越える体験」「新しいものを創り出す体験」をすることができる好機だと捉える。したがって、特に学級活動（1）の取組を充実させることが、目指す子どもの育成につながると考える。

3. 特別活動研究と2つの研究の関連

(1)特別活動 × UDL

当校が最も大切にしている授業デザインの概念的なフレームワークがUDLである。UDLでは、子どもたちが学びたいという気持ちを持ち、学ぶ方法が分かり、自分に合った柔軟なやり方で学習に取り組める「学びのエキスパート」の育成を目指す。UDLに基づく授業改革を推進することで、子どもたちの主体性を育み、自らの学びを舵取りする学習者へと成長させることができる。主体的な学びにより、子どもたちが自分自身で獲得した各教科の資質・能力は、特別活動において発揮されるとともに、学びを深めることにつながる。



主体性を中心とした教科と特別活動の往還関係

特別活動の話合い活動では、子どもたちが互いの考えを伝え合うための手段として、言語活動が重要視されてきた。しかし、当校の取組の中では、一部の発言力のある子どもの意見だけで話合いが進み、発言が苦手な子どもの考えを取り上げることができにくいことが明らかになった。議論が不十分なまま合意形成に進むようなこともあった。これらは、文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説 特別活動編の中で改訂の要点で指摘されている「互いのよさや個性、多様な考え方を認め合い、等しく合意形成に関わる」という部分に課題があったと捉えている。

このような課題に対して、本研究ではUDLの視点からアプローチする。すべての子どもたちが自分に合った方法で考えを伝え合うことで、今まで以上に等しく合意形成へ参画することが可能になると考える。

(2)特別活動 × ICT

GIGAスクール構想によって、ICTの活用が今まで以上に強く求められるようになり、全国の自治体が大きく動き始めた。新型コロナウイルスの感染拡大により、この動きは急激に加速し、1人1台端末の実現も目前に迫っている。今後は子どもたちの学び方も劇的に変わることが想定される。特別活動は、集団活動を中核としており、コロナ禍では従来のような活動の実施には難しさが伴う。この課題を解消する可能性を秘めているのが、ICTを活用した特別活動の実現である。

しかし、これまでの特別活動研究では、他の教科研究に比べてICTを活用した実践事例が多いとは言えない。学級会での話合い、各種行事への活用、キャリアノート・キャリアパスポートとしての利用など、多岐に渡る活用方法が考えられる。1人1台端末の実現により、今まで諦めていたことや不可能だと思っていたことの実現可能性が飛躍的に向上する。今までのような対面によるコミュニケーションのよさ、非対面でのコミュニケーションのよさを踏まえ、よりよい活用方法を模索していく。

本研究では、学級会と、実際の活動の際にICTを活用した実践に取り組む。「どのように非対面で学級会を進めることができるのか」「活動の際にどの場面でICTを活用することが効果的なのか」等、様々な視点からアプローチすることが、withコロナ時代の特別活動につながると考える。

参考文献・引用文献

- ・文部科学省（2017） 小学校学習指導要領解説 総則編 特別活動編
- ・国立教育政策研究所（2018） みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動(小学校編)
- ・CAST(2018) UDL ガイドライン <http://udlguidelines.cast.org/more/downloads>

4. 特別活動研究発表

【実践発表1】「分かり合い」を大切にした学級会

昨年度より、特別活動の研究指定を受け、学級活動に力を入れて取り組んできた。その中で、自分の考えを伝えることが苦手な子が多いことや、考える時間が足りず、終末の合意形成まで辿りつかないという課題が明らかになった。

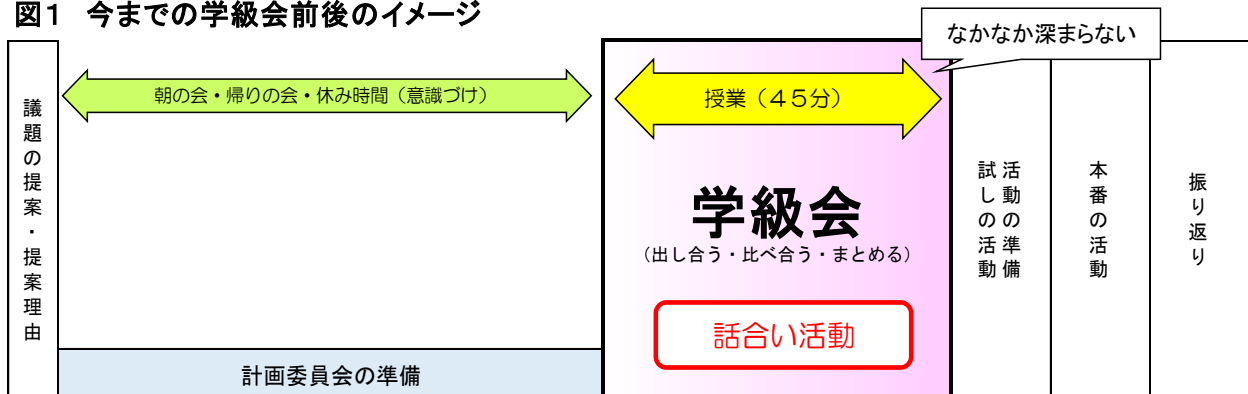
これらの課題に対して、学級の支持的な風土を土台として、伝え方のスキルを指導したり、論点整理の方法を工夫・改善したりすることで、授業の改善に努めてきた。このアプローチによる一定の成果はあったものの、一部の児童には効果的ではなかった。そこで、UDLの視点から子どもの実態を以下のように捉え直した。

- ・話して伝えることは苦手だが、書いて伝えることならできる。
- ・短時間で考えることは苦手だが、時間があればよりよい考えを創り出すことができる。

つまり、従来の話し合い活動を中心とした学級会の進め方は、当校の子どもの実態に合っていなかったのではないかと考えた。よりよい活動を創り出すために、従来のアプローチに加え、当校の子どもたちの実態に合った学級会を創り出す必要がある。

従来の学級会では、以下のように「出し合い・比べ合い・まとめる」という思考の拡散から収束までを一時間の学級会の中で行ってきた（図1）。

図1 今までの学級会前後のイメージ



当校では、以下のように子どもが学びやすい形になるよう、一連の学習過程を再構成し、それを実現するためにディスカッションボード（掲示板）を活用することとした（図2・図3）。

図2 子どもの実態に合わせた学級会のイメージ

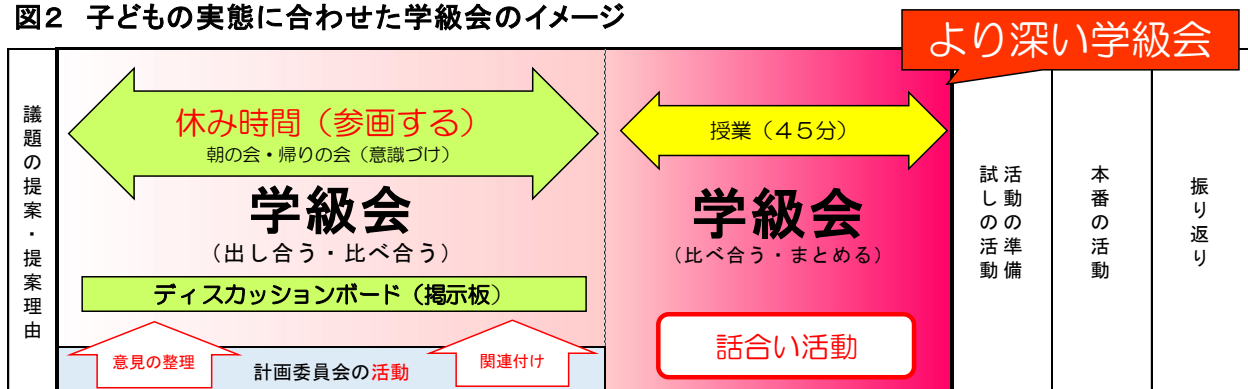
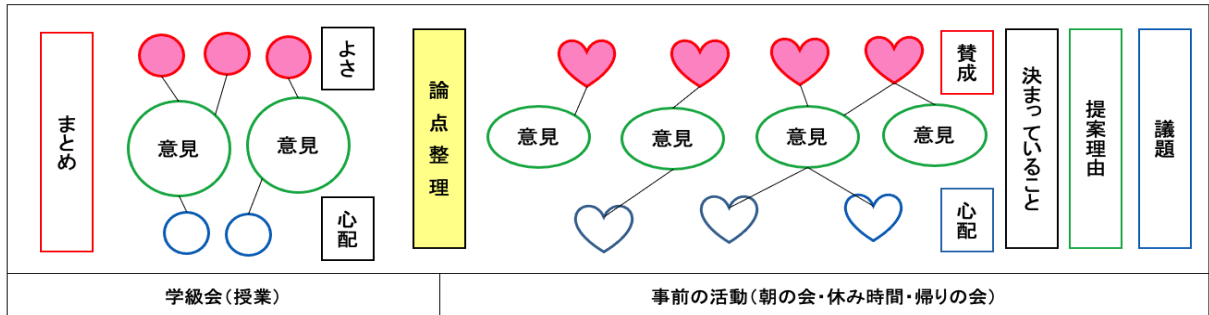


図3 ディスカッションボードのイメージ



廊下などにディスカッションボードを設置し、日常的に子どもたちが意見を交流する環境を整えることで、授業時間にとらわれることなく、お互いの意見を分かり合う機会を十分に確保できる。また、話し合いに限定せず、様々な方法でお互いの意見を「分かり合う」ことが実現できると考える。

ディスカッションボードを活用した学級会では、次の3つの手だてを講じる。

【手だて1】 ディスカッションボード（掲示板）を設置し、互いの意見を分かり合う期間を設定する。

ディスカッションボードを設置することで、学級会を日常化することができる。議題や提案理由については、学級の実態、話し合う内容、学級が目指す姿等を含んだものにした。ディスカッションボードでは、「やりたいことを出し合う」「質問とそれに対する回答を出し合う」「賛成・心配なこととその理由を出し合う」を行い、直接書き込んだり、付箋紙に書いたものを貼ったりする。計画委員会（司会）は、出された意見を整理してまとめたり、関連のあるものを線でつないだりすることで整理・構造化し、分かりやすいディスカッションボードにする。また、計画委員会は、朝の会や帰りの会などを活用して、進捗状況を説明したり、参加を促したりする。

45分授業での学級会では、意見を発表する機会に限られるが、ディスカッションボード上で事前に行うことで、より多くの子どもの意見を可視化することができる。また、話すことが苦手な子どもは、書くことで自分の考えを表現できる。考えが可視化されて残ることで、友達の見解と関連づけて自分の意見を再構成する際に役立たせることができる。

【手だて2】 子どもたちに、今の学級にとって必要なことは何か問い、論点を整理する。

子どもたちが出す意見には様々な思いが隠れている。ディスカッションボード上でそれらを整理することで、思いを可視化することができる。その中から、「理由」の部分に着目させて「今の学級にとって必要なことは何か」を問う。従来は学級会の本時の中で、教師が瞬間的に論点を見極めなければならなかったが、ディスカッションボード上で行うことで、子どもたちと共に熟考を重ねた上で、子どもたちと共に論点を整理することができる。

【手だて3】 事前に論点を整理した後、学級会の授業で合意形成を図る。

ディスカッションボード上で論点整理を行った後、事前に論点を示した上で学級会（授業）を始める。論点に合わせてよりよい意見が複数出ること想定される。その場合は、それぞれの活動のよさや心配なことを確認しながら話し合いを進めていく。

合意形成の形として、「新たな考えをつくる」「意見を合わせる」「優先順位を決める」「条件を付ける」「少しずつ全部行う」「共感的に理解し、譲る」などがある。できる限り「多数決」という決め方にならないよう、適切に教師と司会団が話し合いの方向性を確認しながら進めていく。

【提案発表2】「子どもの願い」で創り上げる新しい特別活動

学校行事や児童会活動は、学校や地域の文化として根付いているものが多い。高学年の子どもがリーダーとして活躍する姿を見て、下学年は憧れを抱き、「自分も高学年になったらリーダーとして活躍したい」という願いをもつことが、よき伝統となっている。子どもたちの卒業文集等を見れば分かるように、学校行事や児童会活動が子どもたちの思い出として心に残り、学校生活を豊かにすることは言うまでもない。

一方、学校や地域の文化として根付いていることから大幅な変更や改革が難しく、学校・教師も「例年通り」「前年度踏襲」が慣例となっている側面もある。それは子どもたちも同様で、「去年と同じ内容のことがしたい」という思いが強く、一定の枠組みの中で創意工夫をしながらよりよい活動を目指してきた。

現在、新型コロナウイルスの感染拡大により、様々な行事の例年通りの実施が難しくなり、中止や延期、規模の縮小が余儀なくされている。各種行事は、今までの形が通用しなくなっていると言える。しかし、この国難と言える状況は、視点を変えることで「今までにない好機」と捉え直すことができる。それは、子どもたちと共に、既存の枠組みを超えた新しい特別活動を創り出すことができるということである。子どもたちは「新しい学校の歴史を創り出す瞬間」に立ち会うことができる。

大切にしたいことは、「子どもだけ」「教師だけ」で課題を解決して、新しい活動を創り出すことではない。「子どもと教師が共に」目の前の課題に向き合い、課題解決をしながら、新しい特別活動を創り出すことである。子どもたちは、教師にはない豊かな発想力・創造力をもっている。教師には、子どもたちにはない自分自身の実体験に基づいた確かな経験がある。互いのよさを最大限発揮することで、よりよい特別活動を創り出すことができると考える。

この新しい特別活動を創り出す過程では、以下の5つの手だてを講じる。

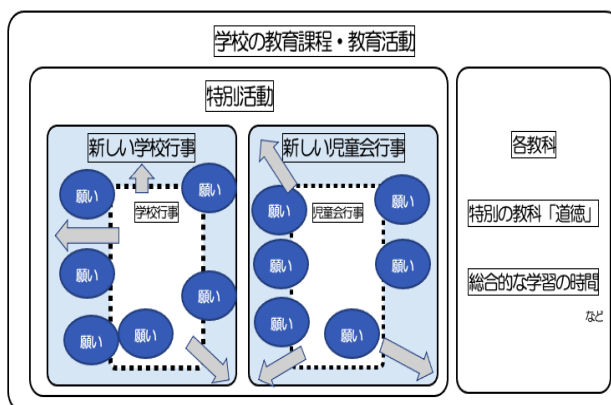


図4 既存の枠組を超えるイメージ図

【手だて1】 固定観念を打ち破り、新しい取組への動機付けをした後、子どもたちへ新しい活動への願いを問う。

大人だけでなく、子どもたちにも今までの経験によつ固定観念が存在する。例えば、「運動会と言えば、〇〇がなければならない」「文化祭と言えば、△△がなければ変だ」など様々なものがある。これらは、新しい特別活動を創り出す際に、思考の広がりやを阻害してしまう。子どもたちには、今までの考え方の枠組を超えて、柔軟で豊かな発想で新しい特別活動を創り上げてほしい。

そこで、始めに子どもたちの固定観念を打ち破るための「きっかけ」を与え、新しい取組みへの動機付けを行う。教師が直接子どもたちに、「子どもたちの新しい発想が必要であること」を語るとともに、「新しい取組を全力で応援する」ことを伝える。その後、子どもたちに「どんな活動をしたいのか」「なぜその活動をしたいのか」を問い、新しい活動について考えさせ、子どもたちの新しい活動に対する願いを受け止める。

【手だて2】 活動のねらいと関連付けながら、子どもと共に新しい活動について話し合う。

子どもたちの願いは、活動の目標に関するもの、活動の具体的な内容に関するもの、個人的な思いなど、多岐に渡る。これらを子どもたちと教師が話し合う場で共感的に受け止めながら、話し合いを進めることを大切にする。

当然、活動のすべてを子どもたちに考えさせることは難しい。日程や場所など、変更が難しい部分については教師が提示し、内容面の最も重要な部分についてのみ子どもたちと話し合う等、様々な状況に応じて、子どもたちの柔軟な創造力・発想力が生かされるような内容について取り扱うこととする。

教師が大切にすべきことは、活動のねらいを全職員で共有することであり、活動の内容は柔軟に変化させることである。しかし、教師側の考える活動の内容と、子どもたちの願いが必ずしも合致するとは限らない。子どもたちの主体性を大切にしながら、どうすれば子どもの願いと合致する活動になるのか考えながら話し合いを進めて、活動の核になる部分について、合意形成を図る。

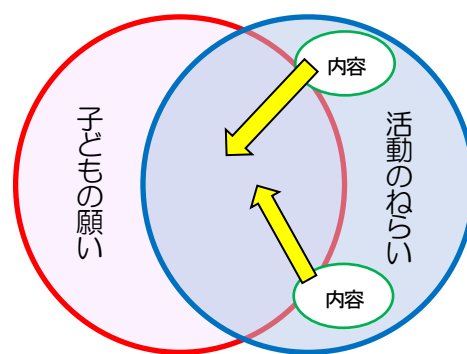


図5 共有部分を大切にし、内容を変化させる

【手だて3】 試しの活動後に振り返りの場を設定し、活動を修正する機会を与える。

実際に新たな活動を行うと、当初は想定していなかったことが必ず起こる。そこで、事前に本番と同じ環境で活動を行うことで、修正点に気付かせる。それをよりよい活動へとつなげるために、振り返りの場を設定して、活動の修正の機会を与える。活動を振り返るためには、ICT機器を活用して活動の様子を動画で撮影し、視聴することが非常に効果的である。お互いの活動の様子を部分的に視聴し合い、修正する場面を具体的に伝えることができるからである。

【手だて4】 活動のクライマックスで、活動の価値付けを行い、ハッピーエンドを演出する。

新しい活動を創り出すことは簡単なことではない。幾度となく試行錯誤を繰り返しても、上手くいかないことも当然ある。暗い話題の多いコロナ禍において、子どもたちには、自分たちが様々な課題に向き合い、多くの課題を乗り越え、友達や大人と協力しながら、自分たちの力で新しい活動を創り出した一連の「過程」に誇りを感じ、自信をもってこれからの学校生活を過ごしてほしい。

そこで、子どもたちに、新しいことに取り組んだ活動の価値を伝える。その後、子どもたちの心に残るようなハッピーエンドを演出する。心に残る感動体験は、一連の活動の中で学びを強化し、子どもたちを大きく成長させる原動力につながると考える。

【手だて5】 一連の活動での学びを共有し、次の活動につなげる。

一連の活動が終わった後、活動の振り返りの場を設定する。自ら設定した目標に加えて、活動を通じて「学んだこと」と「そう思った理由」という視点で振り返る。子どもたちは活動の中で様々なことを体験的に学んでおり、それは当初想定していなかったものもある。それらを具体的なエピソードと交えて共有することで、仲間の頑張りや集団としての成長を自覚させ、今後の学校生活につなげる。

参考資料

令和2年度 小須戸小学校 教育ビジョン

特別活動全体計画 ※2020年3月作成

年間指導計画 ※2020年3月作成

キャリアパスポート関連

教育目標

よく考え 助け合う 子ども

伝える力

認める力

律する力

学び合い

共に高まる子ども

- UDLに基づきICTを活用した授業改革の推進
- 対話的な学びを活性化する手立ての工夫

かかわり合い

相手を思いやる子ども

- かかわりを広げ、深める
あいさつの励行
- 認め合い、思いやる心を育てる
特別活動の充実

自分と向き合い

自ら鍛える子ども

- 自己調整を目指す
「元氣アップ週間」の取組
- めあてを意識した
「ぐんぐんタイム」の取組

iKosudo

- アセスを活用した
児童の特性や多様性の理解
- 児童の多様な学び方に
対応した支援の提供

- HP,たより,配信メールを
活用した情報発信
- コミュニティ・スクール
導入に向けた体制づくり

～小須戸を愛する子ども～

インクルーシブ教育システムの構築

地域と一体となった学校づくり



令和2年度 特別活動全体計画

新潟市立小須戸小学校

児童の実態	
○一生懸命で素直に諸活動に取り組む子どもが多い。	
●新たな活動を考えようと挑戦したり、創意工夫して取り組んだりすることが少ない。	
●自分たちの力で、よりよい学校生活を創り上げようとする意識が低い。	

教育目標 よく考え 助け合う 子ども		
--------------------	--	--

★特別活動のテーマ★		
子どもたちが本気で取り組む特別活動		

目指す子どもの姿		
低学年	中学年	高学年
互いに助け合ったり、協力したりしながら、学級生活を楽しくする子ども	互いを尊重して、協力しながら、学級の生活づくりに主体的に参画する子ども	互いを信頼して支え合いながら楽しく豊かな学級や学校の生活づくりに主体的に参画する子ども

指導の重点	
各教科	子どもたち自身が課題を設定し、お互いの意見を伝え合いながら課題解決へ向かう協働的な学習ができる授業構成をする。
道徳	児童の悩みや学校生活における葛藤などに関連のある内容を扱い、道徳的価値について理解させ、特別活動が道徳的活動の場になるようにする。
生徒指導	望ましい人間関係を基盤として、集団生活での諸問題に関して、子ども自身の力で適切に対応できるようにする。
その他	言われたことをそのままのことよりも、主体的行動を価値付けて評価することを心掛ける。

育成を目指す資質・能力			
	知識・理解	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
人間関係形成	多様な人と協働して活動する意義の理解やそのための方法	お互いの意見や考えの違いを尊重し、互いのよさや可能性を生かす関係をつくること	社会的集団における人間関係を、自主的・実践的によりよいものへと形成しようとする
社会参画	自発的・自治的な集団活動の意義や活動を行う上で必要な合意形成をするための方法	学級や学校の集団の生活の課題を見出し、解決するために話し合い、合意形成を図ること	学級や学校の集団や活動に参画し、主体的に問題解決をすることを通して、よりよい社会や生活を創造しようとする
自己実現	自己実現に必要な自己理解を深め、意思決定をするための方法	自己のよさや可能性を生かし、自己の在り方や生き方を考え、設計するなどの意思決定ができること	現在及び将来の自己の生活の課題を発見し、目標を決めて取り組み、自己の可能性を拓こうとする

指導の重点	
◎様々な集団活動や体験活動、異年齢集団による活動を意図的に設定して、自主的・実践的な活動になるように指導する。	
◎「気付く→考える→話し合う→実践する→振り返る」の一連の学習過程を繰り返しながら、学んだことを実感できるように指導する。	

学級活動	児童会活動	クラブ活動	学校行事
・学級や学校生活の充実と向上を目指し、生活上の諸問題を解決したり、組織の運営や仕事をしたりする活動を通して、主体的・実践的な態度を育てる。 ・希望や目標をもって生きる態度、基本的な生活習慣や望ましい人間関係、心身ともに健康で安全な生活態度、学校図書館の利用、学校給食との望ましい食習慣など、日常生活や学習への適応及び健康で安全な生活態度を育てる。	・学校生活の向上のために、よりよい活動を目指して話し合い、創意工夫しながら友達と協力して活動しようとする主体的・実践的な態度を育てる。 ・活動の意義や役割を自覚し、意欲や関心をもって取り組む態度を育てる。	・豊かな学校生活を作り出すことを目指し、異年齢集団の中で活動計画を立てたり創意工夫をしながら実践したりすることによって、主体的・協働的な態度を育てる。 ・共通の興味や関心をもつ異年齢集団の中で、創意工夫を生かした活動計画を立てたり実践したりすることによって、個性の伸長を図る。	・学校生活に秩序と変化を与えるとともに、学校生活の充実と発展に資する体験活動を行い、創意工夫を生かして学校生活を楽しいものにし、児童の心身の健全な発達を促す。 ・日頃の学習成果や思い、願いを総合的に発表して、集団への所属感を高めるとともに、互いに高め合う集団として望ましい態度を育てる。

児童会活動			クラブ活動	学校行事
代表委員会活動	委員会活動	児童集会活動	クラブ活動	学校行事
【活動について】 ・学校生活の充実と向上を図るために、学校生活に関する諸課題を話し合い、解決を図るための活動を行う。 ・総務委員会の要請により設定し、総務委員会が準備・運営を行う。 【構成員】 ・総務委員会（全員） ・3年生以上の各学級委員2名 ・各委員会の委員長1名	【活動について】 ・学校生活を向上発展させ、より豊かなものにしていくために、児童の発意や創意工夫を生かして活動を分担して行う。 ・水曜日6限に行う。 ・全13回（月1～2回程度）実施する 【構成員】 ・5・6年生全員 【留意事項】 ・原則、通年で所属し、委員長1名・副委員長2名・書記2名、計5名を選出する。 ※副委員長・書記の1名は5年生 ・前年度末に次年度の所属を決定し、第1回委員会までは新6年生のみで活動する。	【活動について】 ・楽しく豊かな学校生活にするために、児童による活動計画に基づいて、児童が一堂に会した中で活動を行う。 【構成員】 ・全校児童 【主な集会活動】 ・1年生を迎える会（4月） ・児童朝会（適宜） ・こすどっ子まつり（12月） ・6年生ありがとう集会（2月） 【縦割り班活動】 【活動について】 ・異年齢集団（なかよし班）を構成し、社会性や協調性を育てる諸活動を行う。 【主な縦割り班活動】 ・なかよし班清掃 ・小須戸甚句（運動会） ・You遊タイム ※支部子ども会（全18組）も含む。		



令和2年度 新潟市立小須戸小学校

第2学年 年間指導計画

よく考え 助け合う 子ども

伝える力

認める力

律する力

令和2年度の教育・学習を密に、小須戸小学校で「伝える力」「認める力」「律する力」の3つの資力・能力を大切に、教育課程を再編成しました。「伝える力」とは、仲間と共に学び合う中で、相手や場面などに応じて、自分の考えや思いを語る力のことです。「認める力」とは、他者・かわり合う中で、多様な考え方を理解したり、受け入れたり、共感したりする力です。「律する力」とは、自分と向き合いながら、自分で自分をよくよくしようとする力のことです。この教育課程の基盤を通して、すべての子どもが小須戸で暮らせることできるよう、保護者・地域と一体となつた教育活動を展開していきます。

	4月	5月	6月	7月	8・9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
国語	<p>「おはなはな」の読みかた つづき「おはなはな」の読みかた おはなはな(9) おはなはな(10) おはなはな(11) おはなはな(12) おはなはな(13) おはなはな(14)</p> <p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(15) おはなはな(16) おはなはな(17) おはなはな(18) おはなはな(19) おはなはな(20)</p>	<p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(21) おはなはな(22) おはなはな(23) おはなはな(24) おはなはな(25) おはなはな(26)</p> <p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(27) おはなはな(28) おはなはな(29) おはなはな(30) おはなはな(31) おはなはな(32)</p>	<p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(33) おはなはな(34) おはなはな(35) おはなはな(36) おはなはな(37) おはなはな(38)</p> <p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(39) おはなはな(40) おはなはな(41) おはなはな(42) おはなはな(43) おはなはな(44)</p>	<p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(45) おはなはな(46) おはなはな(47) おはなはな(48) おはなはな(49) おはなはな(50)</p> <p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(51) おはなはな(52) おはなはな(53) おはなはな(54) おはなはな(55) おはなはな(56)</p>	<p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(57) おはなはな(58) おはなはな(59) おはなはな(60) おはなはな(61) おはなはな(62)</p> <p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(63) おはなはな(64) おはなはな(65) おはなはな(66) おはなはな(67) おはなはな(68)</p>	<p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(69) おはなはな(70) おはなはな(71) おはなはな(72) おはなはな(73) おはなはな(74)</p> <p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(75) おはなはな(76) おはなはな(77) おはなはな(78) おはなはな(79) おはなはな(80)</p>	<p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(81) おはなはな(82) おはなはな(83) おはなはな(84) おはなはな(85) おはなはな(86)</p> <p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(87) おはなはな(88) おはなはな(89) おはなはな(90) おはなはな(91) おはなはな(92)</p>	<p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(93) おはなはな(94) おはなはな(95) おはなはな(96) おはなはな(97) おはなはな(98)</p> <p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(99) おはなはな(100) おはなはな(101) おはなはな(102) おはなはな(103) おはなはな(104)</p>	<p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(105) おはなはな(106) おはなはな(107) おはなはな(108) おはなはな(109) おはなはな(110)</p> <p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(111) おはなはな(112) おはなはな(113) おはなはな(114) おはなはな(115) おはなはな(116)</p>	<p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(117) おはなはな(118) おはなはな(119) おはなはな(120) おはなはな(121) おはなはな(122)</p> <p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(123) おはなはな(124) おはなはな(125) おはなはな(126) おはなはな(127) おはなはな(128)</p>	<p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(129) おはなはな(130) おはなはな(131) おはなはな(132) おはなはな(133) おはなはな(134)</p> <p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(135) おはなはな(136) おはなはな(137) おはなはな(138) おはなはな(139) おはなはな(140)</p>	<p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(141) おはなはな(142) おはなはな(143) おはなはな(144) おはなはな(145) おはなはな(146)</p> <p>「おはなはな」の読みかた おはなはな(147) おはなはな(148) おはなはな(149) おはなはな(150) おはなはな(151) おはなはな(152)</p>
社会												
算数												
理科												
生活												
地域行事 学校行事等												
学級活動												
道徳												
音楽												
図画工作												
体育												
外国語活動												
家庭												

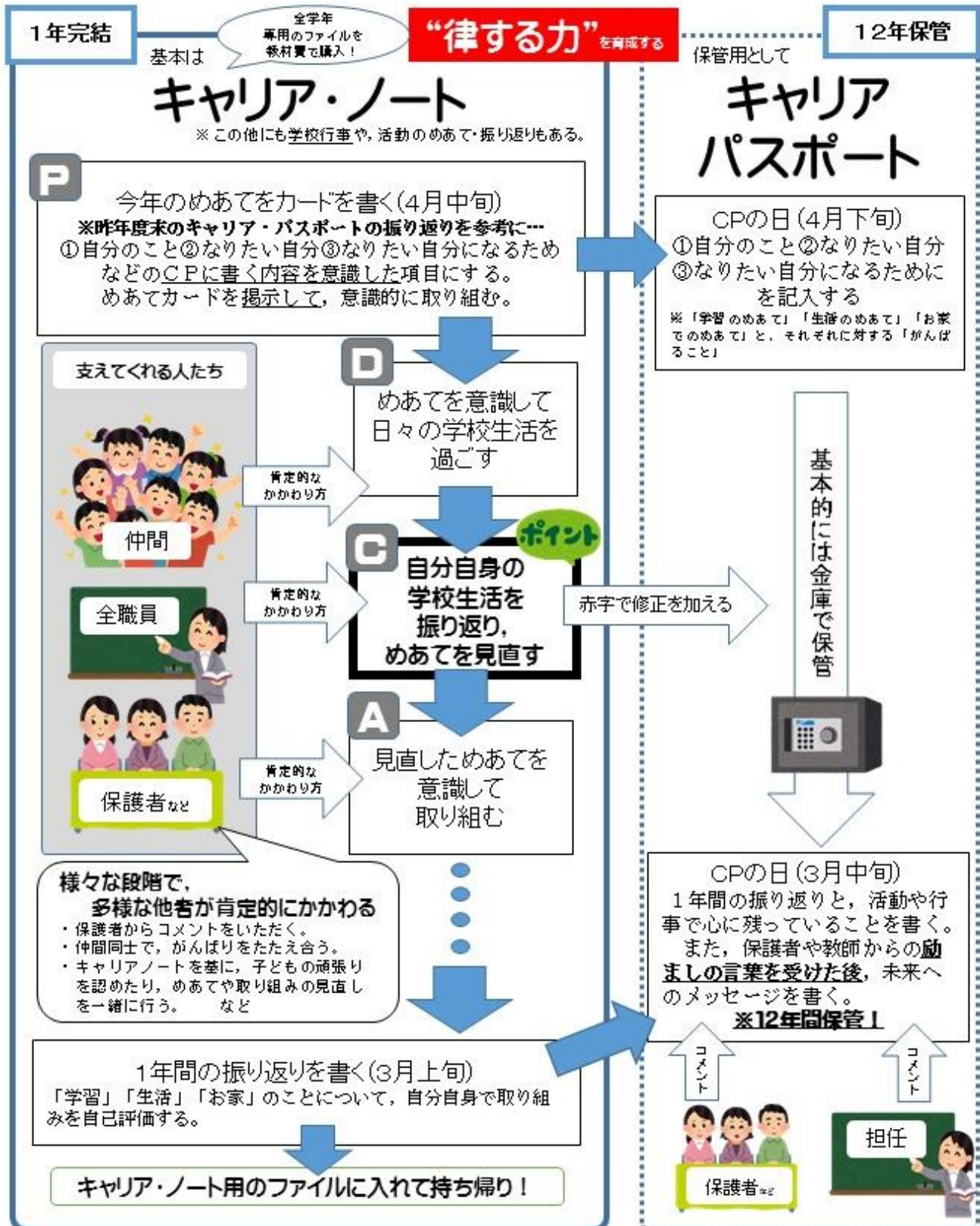
重点単元・各種教育との関連・・・ ◇プログラミング教育・情報教育 ▲図書館教育 ◎食育・食に関する指導 ●環境教育 ☆保健教育 □安全教育 ★福祉教育 ○国際理解教育 ■キャリア教育 ▽人権同和教育

「キャリア・パスポート」「キャリア・ノート」の運用について

学級活動部
キャリア教育部

ここがポイント！ ※あまり難しく考えない！

- 実施してきたカードに「保護者」「職員」、そして「仲間」という視点を加えるだけ！ …【キャリア・ノート】
- 「キャリア・パスポートの日(仮)」に振り返り、パスポートに転記して保管する。…【キャリア・パスポート】





小須戸式

「キャリア・パスポート」 「キャリア・ノート」にかかわる



Q. キャリア・ノートに、どの程度の内容を書かせればよいですか？

A. 全学年で統一するのは、「1年のめあて」「持久走記録会」「学習発表会」の3つにします。

新潟市教育委員会 学校支援課だより「令和元年度 Support No.3」によると、キャリア・ノートの要件には、以下の4点が挙げられています。

- 児童生徒自らが記録し、学習や生活を見通し、振り返ることができるもの
 - 学校生活全体(学習・行事・各種活動)及び家庭・地域における学びを含むもの
 - 大人(教師や家族)が対話的に関わる(コメント欄等)ことができるもの
 - 各校の特色や児童生徒の実態に応じた内容や書式となるように工夫したもの
- この要件を留意した上で、キャリア・ノートを作成しましょう。

Q. 上記の3つ以外に、キャリア・ノートを書かせたり、保管させたりすることはできますか？

A. 市教委提示の要件を満たすものであればOKです。

キャリア・ノート、キャリア・パスポートの目的の1つである「なりたい自分になるために、見通しを立てて臨み、振り返りをする」ことで、自己の変容や成長を実感し、新たな学びへ意欲を高める」ということに資するものであれば、様々なものが考えられます。

例えば、「修学旅行」「自然教室」などの特別活動関連のものは、「活動のめあて」「振り返り」「先生から」等のコメントの記入欄を設けることで、キャリア・ノートとして取り扱うことができます。また、他教科等で作成したものの中でも、上記に示したようなコメント欄を設け、キャリア・ノートとして取り扱い、保管していくこともできます。

Q. キャリア・パスポートに書く「教師からコメント」は起案しますか？

A. 起案しません。ただし、最終的に誤字・脱字が無いよう、学年・学年部など、複数の目で点検をしましょう。

教師からのコメントは、肯定的なコメントに限られます。小・中・高の12年間保管されることを考えて、適切な内容を記述しましょう。

Q. 持ち帰り時の紛失を想定して、「写し」を作成しますか？

A. 作成します。スキャンをして、データベースで保管しましょう。

家庭に持ち帰らせる前に、スキャンをしてデータを保管してから家庭に持ち帰らせましょう。必要が無くなったデータは随時削除しましょう。

Q. 筆記具は何を使用させますか？教師は何を使用しますか？

A. 指定はありません。ただし、消えにくいものを推奨します。

教師からのコメントは、消えにくいもの(油性のボールペン等)を使用するとよいです。

